



Title	中古語モダリティの階層構造：助動詞の意味組織をめざして
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 1992, 58, p. 35-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中古語モダリティの階層構造

―助動詞の意味組織をめざして―

高山善行

キーワード…述語構造、モダリティ、助動詞、係助詞の作用域

はじめに

従来、述語構造の研究は助動詞の相互承接現象の分析を軸に展開され、文法研究に寄与してきた。しかし、そのとらえ方は述語の意味的階層と助動詞個々の意味とを関係づける視点においては問題となる点が少なくない。本稿では、「モダリティの助動詞」に焦点を当てて、述語構造と助動詞の意味との積極的な連絡を試みる。その営みを通して、述語構造を階層的に把握することの有効性と限界とが確かめられることになる。

一 本稿の目的

助動詞の意味と文との交渉のありかたが二つおり想定されることについて、かつて述べた⁽²⁾。一つは文表現との交渉であり、一つは文構造との交渉である。本稿は後者について私見を明らかにするも

のである。

古代語における助動詞の意味研究にかなりの量の蓄積があることは周知であるが、問題が山積されていることもまた周知であろう。

たとえば、△婉曲△という表現効果、△詠嘆△という文の情意、

△命令△という対他的行為―これらを助動詞の意味に担わせてしま

う。△推量△とは何か、△伝聞△とは何かというような概念規定が

なされていないなど枚挙にいとまがない⁽³⁾。かつての意味のとらえ

かたは「意味記述」というよりは「あだ名をつけた」という方が事

実を正確に表しているであろう。助動詞が文表現において重要な役

割を担うことは確かであるが、文構成においては文の構成メンバー

の一つに過ぎないことを忘れてはならない。助動詞が文の述語構造

と一体のものであるなら、そこに還して母胎と一体化した形で理解

するのが正当だし、それ以外に述語構造と助動詞の意味との連絡を

つける道はないであろう。

現在に至るまで、述語構造についていくつかの理解が示されてきた。それらにはば共通していることは、助動詞の相互承接現象を軸に（あるいはそれに依存した形で）階層構造がイメージされている

ことであろう。こうした述語構造の把握を「階層把握」と呼ぶことにしよう。その代表として北原保雄氏と仁田義雄氏の述語構造モデルが挙げられる。⁽⁴⁾ 両氏のモデルは現代語の考究をもとに創案されたものであるけれども、「階層把握」そのものは古代語においてもかなりの有効性をもつことが期待される。⁽⁵⁾ たとえば、近藤泰弘(一九九一)はその流れを継承して中古の「モダリティの助動詞」の体系をとらえる試みであって注目される。⁽⁶⁾ このように「階層把握」は古代語の文法研究においても広がりがつつあるようである。

しかし、問題がないわけではない。特にモダリティの議論においては「階層把握」ではとらえきれない問題が多いように思われる。以下、「階層把握」を古代語のモダリティの研究に援用する際、問題となる点を挙げておく。

α 係助詞の述語構造へのかかわりが扱い切れない。文を平面的にとらえる以上仕方がないのかもしれないが、「階層把握」が述語構造の本質をついているとすれば、あたかも鏡が立体の姿を映すように、階層はなんらかの形で係助詞の作用を映し出すにちがいない。

β 助動詞という品詞論上の単位が階層設定の単位となっている。形式の連鎖がそっくりそのまま述語の意味的階層に対応する保証は何もない。従来の階層理解では多義的形式(ベシ、ケリ、ムなど)が正確に位置づけられない。

γ 階層間の連続性の把握について。階層を設定することと引換えに層と層との連続性が捨象されてしまうと問題である。たとえば、助動詞層と終助詞層、プロポジションとモダリティの連続性をどうとらえていくか。より有効性の高い階層の設定をめざすなら、それは層と層との連続性を明らかにするものでなければならぬ。

ただ、問題があるにせよ、「階層把握」が多数の支持を得ている事実は動かしがたい。仮に「階層把握」を認めない立場をとるにしても、本格的な方法的批判を意図するならば、いったんこの把握に乗ってみて有効性と限界とを見極めておく姿勢が要請されよう。本稿はそうした要請にもとづいた、中古語のモダリティを対象とした「階層把握」の批判的実践である。

二 現象の記述

二・一 分析の方法

本稿での考究は中古の共時態においてなされる。分析の対象となる形式は、一般に「推量の助動詞」として括られる形式が中心になるが、周辺に位置すると思われる形式、たとえば、ツ、ヌ、ケリといった一般に「時の助動詞」と呼ばれている形式も扱うことにする。⁽⁷⁾ これは典型的な *Present* モダリティ形式と周辺の形式との連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダリティとが分離しにくい古代語の実情も考慮に入れていることである。具体的には以下の諸形式を分析の対象とする。

ツ、ヌ、ケリ、ベシ、マジ、終止ナリ、メリ、ム、ラム、
ケム、マシ、ジ

本稿ではこれらの形式を一括して「モダリティの助動詞」と呼ぶことにする。この種の形式は他にも存するが文体的偏りの顕著なもの(ラシ、ペラナリなど)は今回はとりあげない。

また、用例採集の資料は「源氏物語」を中心に和文系文学作品を用いる。文体的要因の混入を避けるため、今回は訓点資料等の漢文系資料は用いない。なお、「階層把握」の検討が中心となるため、現象の報告、挙例は必要最小限にとどめることにする。

続いて分析の具体的な方法について述べる。本稿では各形式にくつかのテストをおこなって構文的特徴を取り出し、その結果から階層を設定してみるという手順を踏むことにする。テスト形式をとる大きなメリットは同一の尺度で測ることにより、各形式の共通性と差異とを相対化できることである。従来、形式間の差異に重点が置かれていたが、差異が本質的なものか否かを知るには共通性を押さえることが前提となろう。差異の価値は共通性と合わせてみてはじめて見えてくる。共通性と差異とは切断する紙の表と裏の関係であって、「表だけ切る」「裏だけ切る」ということは本来不可能なのである⁽⁸⁾。

二・二 構文的特徴の記述

以後、具体的に構文的特徴の記述をおこなうのだが、三つの観点からアプローチを試みる。すなわち、

- 1 助動詞の下接 …………… 助動詞と助動詞との関係
- 2 従属句中の生起 …………… 助動詞と句との関係
- 3 係助詞との関係 …………… 助動詞と文との関係

である。研究のながれはおおよそ1√2√3の順で進められてきたと言えるだろう。研究の蓄積から考えると、テストそのものの信頼度の高さも1√2√3（高√低）の順であることが予想される。

① 否定形式下接テスト

否定辞が下接しうるのはツ、ヌ、ベシである。ツ、ヌについてはごく少数ながら例が報告されている⁽¹⁰⁾。また、ベカラズの例は「源氏物語」には僧の会話文の一例だけであって、漢文的要素が顔をのぞかせた例と見てよい⁽¹¹⁾。

〔ベカラズ〕

（一）「人の命久しかるまじきものなれど、残りの命、一二日をも惜しまずはあるべからず。」
（源氏、手習）

② テンス形式下接テスト

テンス形式キが下接しうるのは、ツ、ヌ、ベシ、マジ、メリ、終止ナリである。それぞれ、⁽¹²⁾ テキ、ニキ、ベカリキ、マジカリキ、メリキ、ナリキの形で承接する。

〔ナリキ〕

（二）いと、昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。
（源氏、蜻蛉）

ナリキは係助詞の結びと連体句中の例だけが見られ、文末終止「ナリキ」の例は今のところ見つかったくない⁽¹³⁾。

③ モダリティ形式下接テスト

モダリティ形式が下接しうるのはツ、ヌ、ベシ、マジである⁽¹⁴⁾。やや詳しく言えば、ベシ、マジともにメリ、終止ナリという証拠推量形式 *endearing*⁽¹⁵⁾ やそれにつながるケリが下接し、ム、ケム、マシといったム系の形式はベシの方だけに下接する。

〔ツベシ〕

(3)「…船子どもは、腹鼓をうちて、海をさへ驚かして、波立てつべし。」
(土佐日記)

「ヌベシ」

(4)かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひにほろびぬべしとて、…
(伊勢物語)

「ベカリケリ」

(5)「…女宮たちのあまた残りどどまる行く先を思ひやるなん、さぬ別れにも絆なりぬべかりける。」
(源氏、若菜上)

「マジカナリ」

(6)参り来て見出し立てんとするを、寄せ給まじかなれば、いかがすべからん。
(蜻蛉日記)

「ベカラム」

(7)「…いかならんをりにか、その御心ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを、…」
(源氏、若菜上)

二・二・二 従属句中の生起⁽¹⁶⁾

④ 仮定句中生起テスト

従属句の中で「もし…ならば」という仮定的な意味を表すものを仮定句と呼ぶことにしよう。⁽¹⁷⁾ 仮定句中に生起しうるのは、ツ、ヌ、ベシ、マジ、マシである。

「一テバ」

(8)「…大人しく見なしてば、ほかへもさらに行くまじ。…」

(源氏、紅葉賀)

「一ナバ」

(9)便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし。(源氏、東屋)

「一ベクハ」

(10)「…この、人の御車入るべくは、引き入れて御門鎖してよ。」

(源氏、東屋)

「一マジクハ」

(11)「さだにあるまじくは、道のほど御送り迎へも、おりたちて仕うまつらんに、…」

(源氏、宿木)

「一マシカバ」

(12)「まして、竜を捕らへたらましかば、また事もなく我は害せられなまし。」
(竹取物語)

⑤ 因由句中生起テスト

主句の原因・理由を表す(「…するから」「…するので」の意)句を因由句と呼ぶことにしよう。因由句中に生起しうるのは、ツ、ヌ、ベシ、マジ、メリ、終止ナリである。ム、ラム、ケム、マシといったム系のものは因由句中には生起しえない。

「一ツレバ」

(13)風いたく吹きぬべしと人々の申しつれば、…
(源氏、野分)

「一ヌレバ」

(14)宮は、そのころまかだたまひぬれば、例の、隙もやとうかがひ歩きたまふを事にて、大殿には騒がれたまふ。
(源氏、紅葉賀)

「一ベケレバ」

(15)「…人もゆゆしく見思ふべければ、今は世にあるものとも人に知らればべらじ」とて、
(源氏、早蕨)

「一マジケレバ」

(16)えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。」
(竹取物語)

「一メレバ」

(17)「…若君は、いかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのみ
なん思し急ぐれば、…」
(源氏、桐壺)

「ナレバ」

(18)「…なにがし僧都みなその心くはしく聞きおきたなれば、また
加へてすべき事どもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべ
き」などのたまふ。
(源氏、幻)

⑥ 逆接句中生起テスト

逆接関係を表す句を逆接句と呼ぶことにする。典型的には、ド、
ドモのなす句を想定している。「モダリティの助動詞」はほとんど
逆接句中に生起できる。前二種の従属句に生起しえなかつたム、ラ
ム、ケムも逆接句には生起しうるのである。

「メド」

(19)「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおほ
えはあらめど、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや。…」
(源氏、若菜下)

「ラメド」

(20)「…なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど、
…」
(源氏、御法)

「ケメド」

(21)「…ひとつ家の内は照らしけめど、もししのかしこき御光に
は並ばずなりにけり。」
(源氏、絵合)

逆接句中に生起しえないのはジとマシである。

⑦ 準体句中生起テスト

ここで扱う準体句は連体ナリに上接した準体句である。ノの結び
で文末終止した準体句もあるが、多くは和歌に見られるものであつ

て文体的要因が混入せざるをえない⁽¹⁹⁾。よつて今回は連体ナリ上接
の準体句に限定しておく。連体ナリ上接の準体句中に生起できるの
はツ、ヌ、ベシ、マジの四つである。

「ツ」

(22)「しかじか。権大納言殿の御八講に参りてはべりつるなり。」
(源氏、蓬生)

「ヌ」

(23)昔、「忘れぬるなめり」と問言しける女のもとに、…

「ベシ」
(伊勢物語)

「マジ」

(24)「ただ今は、人聞きのいとつきなかるべきなり。」(源氏、須磨)

「マジ」

(25)「…何にさる事をさださどけざやかに見聞きけむと悔しきは、
わが御心ながらなほえ思しなほすまじきなめりかし。」(源氏、葵)

二・二・三 係助詞との関係

⑧ ナム共起テスト

係助詞ナムの結びになりうるか否かについて調べてみると、ツ、
ヌ、ベシ、マジ、メリ、終止ナリ、ケリ、ムは結びになりうるが、
ラム、ケム、マシ、ジは結びになりえないことがわかる。ただし、
すでに旧稿で指摘したとおり、ナムの結びとなるムは Epistemic 用
法としてはナムの結びにはならない⁽²⁰⁾。

⑨ ヤ、カ共起テスト

疑問表現と関わりの深い係助詞ヤやカの結びには「モダリティの
助動詞」すべてが結びになりうる。ただし、Evidential系のメリ、

終止ナリ、ケリと否定系のマジ、ジは普通、反語表現となるようである。

「ヤーメル」

(26)「…院の御ありさまに並ぶべきおほえ具したるやはおはする。」
(源氏、若菜上)

「ヤーナル」

(27)「かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる。」
(源氏、浮舟)

「カーケル」

(28)「うたた寝はいさめきこゆるものを、などか、いとものはかなきさまにては大殿籠りける。」
(源氏、常夏)

「カーマジ」

(29)「…などかよそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじき。」
(源氏、空蟬)

「カージ」

(30)はづかしく心づきなきことは、いかでか御覽ぜられじと思ふに、かかるそら言のいでくる、くるしけれど、…(枕草子、二三八段)

⑩ ゾ、コン共起テスト

係助詞ゾあるいはコンの結びとなるのは、ジ以外のすべての形式である。ジはゾ、コンの結びにならず、そのほとんどがハ、モの結びとなる。

二・三 テストの結果

ここで、後々のために前項テスト①～⑩を整理しておく。

I テスト①について。(判断)そのものの否定は原理的に不可能であるから、用いられた形式が(判断性)を表すとしたらテスト①でコトとなる。逆にコトの場合はプロポジション内的意味(コトガラの意味)がとりだされる。

II テスト③。典型的な判断は文に一度のはずであるから、モダリティ形式が重複するとき、前項は(様態性)にずれこむであろう。また、基本的にモダリティ成分を許容しない仮定句中、準体句中に許容されうるのは(様態性)のみである。そこで、テスト③④⑦を括って(様態性)の判定基準とする。

III テスト⑤。因由句に生起して確定条件法をなし、確定的なコトガラに用いられるナムの結びとなることが(狭義推定)と(狭義推量)の境界となることはかつて述べた。テンスが現代語において真正モダリティと疑似モダリティとの境界をなすことから、テスト②もここに含め、テスト②⑤⑧を(確定性)判定基準として括る。

IV テスト⑥。逆接句は終助詞以外はすべて許容できる。また、テスト⑨⑩でとりあげた係助詞は作用が助動詞層全体を覆う。今、助動詞層の述語構造的意味を(様相性)と呼ぶことにすれば、テスト⑥⑨⑩を(様相性)判定基準として括ることができる。

結局、テスト①～⑩は次のように整理されることになる。

I	①	…	(+判断性) or (ー判断性)
II	③ ④ ⑦	…	(+様態性) or (ー様態性)
III	② ⑤ ⑧	…	(+確定性) or (+想定性)
IV	⑥ ⑨ ⑩	…	(+様相性) or (ー様相性)

以上の整理にもとづいた前節テストの結果を表に示しておこう。

表 テストの結果

形式	テスト	①	③	④	⑦	②	⑤	⑧	⑥	⑨	⑩
ツ		△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヌ		△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ベ	シ	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
マ	ジ	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ケ	リ	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○
メ	リ	×	×	×	×	○	○	○	○	△	○
終止ナリ		×	×	×	×	○	○	○	○	△	○
ム		×	×	×	×	×	×	△	○	○	○
ラ	ム	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○
ケ	ム	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○
マ	シ	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○
ジ		×	×	×	×	×	×	×	×	△	×
終助詞		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

【テスト一覧】

- ①否定形式下接
②テンス形式下接
③モダリティ形式下接
④仮定句中生起
⑤因由句中生起
⑥逆接句中生起
⑦準体句中生起
⑧ナム共起
⑨ヤ、カ共起
⑩ゾ、コソ共起

※ 表を見やすくするため、縦に挙げる形式群はテストで○の多い形式から少ない形式へという順で配列してある。(△は用例稀小、×は用例ナシ)

※ 助動詞層と終助詞層との連続性を見る意図から、終助詞ゾ、カの結果も合わせて掲げる。

さて、表の内容からうかがわれる特徴を挙げていくことにしよう。
第一にツ、ヌ、ベシは全く同じ結果を示している。マジもそれらの結果とほぼ一致する。一般に、ツ、ヌは「完了の助動詞」として括られ、ベシ、マジは「推量の助動詞」として括られており、切り離された扱いである。しかし、一般的理解に反して、ツ、ヌとベシとは近い位置にあると言える。今後、意味的性格の連続性が明らかにされるべきである。

第二にケリ、メリ、終止ナリがほぼ同じ結果を示すことが注目される。メリと終止ナリの共通性については、すでに旧稿で検証したところである。ここで、ケリが両者と似た結果を示すことは注目されてよい。「推定の助動詞」として括られるメリ、終止ナリと「過去の助動詞」と呼ばれるケリとの連続性を示す事実と言えよう。テスト⑨において三者いずれもが、すべて反語になることはケリをモダリティの議論に参加させる上で重要な事実であって、形態面、接続面での近さと合わせて了解されるべきであろう。

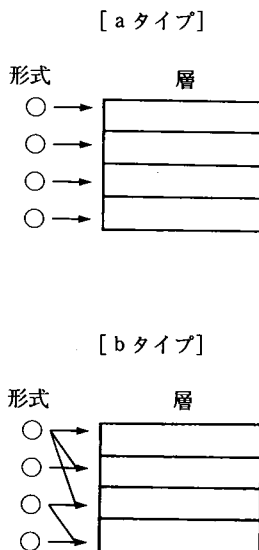
第三に、ム、ラム、ケム、マシといったム系助動詞がほぼ同じ結果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するのに対してマシだけがテスト④⑥において異なるが、これは述語構造的には説明できない問題であると思われる。この点については後述する。

第四に、ジは終助詞の結果とほぼ一致している。ジは形態変化もせず、終止法以外に用いられるのは例外的であって、文構造的にはもはや終助詞に近いことがわかる。

三 意味の階層

さて、いよいよ先の表をもとに階層図を描いてみる。従来の階層は相互承接をそのまま写像した設定方法であって、形式群と層とが「一対一対応」していた。(aタイプ)しかし、それでは第一節βの問題が克服できない。ここで発想を百八十度転換して、形式(群)と層とが「一対多対応」するモデル(bタイプ)を考えてみる。構文的特徴の束を基準として階層を設定するのである。(図1参照)

図1 階層設定の原理



原理的には述語の意味の階層はアブリアオリに存在しており、その階層の中で一形式が複数の層に位置するはずである。(一つの層にもある)一つの層に収まるか、複数の層にわたるかは形式の多義性に相関していよう。このように、本稿の階層設定は相互承接という固定した統語連鎖から階層を設定するのとは逆の設定方法になるわけである。

図2 モダリティの階層

述語構造	意味的階層	
P(プロポジション)	ツ ₁ 、ヌ ₁ 、ケリ ₁	 I (①)
M 1 (様態性)	ツ ₂ 、ヌ ₂ 、ベシ ₁ 、マジ ₁	 II (③④⑦)
M 2 (確定性)	メリ、終止ナリ、ベシ ₂ 、ケリ ₂ 、マジ ₂	 III (②⑤⑧)
M 3 (想定性)	ム、ケム、ラム、マシ、ジ ₁	 IV (⑥⑨⑩)
F (終助詞層)	終助詞 ジ ₂	

※ Pのツ₁、ヌ₁はアスペクト的意味、ケリ₁はテンズ的意味である。

配置したが、従来の個別研究の成果を取り入れて補ったところもある。

以下、この階層図においてポイントとなる点を挙げておこう。

階層図について若干説明を加えておく。まず、先の表の横軸のテスト群を縦軸にして層を設定する。Pはプロポジション、Mはモダリティ層、Fは終助詞層を表わす。図のようにMには三つのレベルが存在すると仮定した。すなわち、〈様態性〉〈確定性〉〈想定性〉の三層である。そして、表の縦軸に置かれた形式群を層ごとに組み込んでいく。できるかぎり表に示したテストの結果に忠実に配置した。

第一に、ベシ、マジが多層的であることである。これは、一般的に言われる両形式の多義性と対応している。たとえば、ベシについては言われる〈様相的推定〉と〈論理的推定〉はここに表れてくる。⁽²³⁾そして、どちらが出力されるかは構文的环境によって決定されることになる。このような意味の決まりかたの詳細についてはそれぞれの形式の個別論で扱われることになる。

第二に、マジとジの分担関係が見てとれる。同じく否定推量の形式であっても、マジは客体的でありジはより主体的であるという報告がかつてなされた。⁽²⁴⁾本稿のテスト結果はその理解に根拠を与えることになるのではなからうか。

第三に、文構造における係助詞の力の及ぶ範囲である。これを以下、係助詞の作用域 *scope* と呼ぶことにしよう。ナムはM2の層までしか作用が及ばない。一方、ヤ、カ、コソはM3まで作用が及ぶ。ハ、モにいたってはさらに深く最深度Fまで及ぶのである。よって作用域はナムVゾ、コソ、ヤ、カVハ、モの順で広くなる。本稿の階層モデルによって、従来直観的に把握されてきた係助詞の係りの作用が始めて客観的にとらえられたわけである。⁽²⁵⁾

試作ゆえ技術的にはまだまだ改良の余地があるが、原理的には形式と層との「一対多対応」モデルの方がよく述語構造をとらえているように思われる。今回は古代語が対象なので詳述は避けるが、本稿の方法は現代語の述語構造を見直す上でも有効であろうことを付け加えておきたい。

以上、「階層把握」の有効に効いてくる側面について述べ来たった。一方、その把握ではとらえきれない側面も当然ある。(もとより「階層把握」は何でも切れる万能のハサミではないので)

たとえば、前述のマシの処理である。マシは述語構造上、ム系の助動詞と近い位置にあると一応言えはするが、テスト④⑥の結果においては他のム系助動詞と異なっている。この差異を「階層把握」でもって説明することは不可能であろう。この点については(現実性―非現実性)という次元において説明可能と思われる。⁽²⁶⁾さらに「肯定―否定」関係をどう組み込むかという問題がある。根本的には「否定」そのものの原理的問題があり、検討を要する。また、終止ナリ、ケリについて言われる〈伝聞性〉の位置づけ、連体ナリとの複合形式であるナメリ、ナルベシなどの扱いなども「階層把握」で扱える範囲を越える問題であろう。「階層把握」という方法は睡眠薬と同様、ほどほどに適用すれば薬だが、強く適用しすぎると毒にもなるということに注意しておくべきであろう。

おわりに

「階層把握」の有効性と限界とについての議論は今後さらに積み重ねていくべきものである。その議論をととして、モダリティとして括ることの有効な領域が見えてくるであろう。「モダリティの助動詞」の意味体系が多次的な構造を持つとしても、まず文との連絡のつく範囲を押さえておくことが先決である。本稿がそのささやかな一歩となることを望みたい。それは文から離れてしまっていた助動詞を文に還していくところから始められなければならないかった。助動詞の意味組織が編まれるまでの道のりは限りなく遠い。

(一九九二年一月十二日 稿了)

注

- (1) 本稿では広義推量の助動詞にケリを加えた助動詞群を一括して「モダリティの助動詞」と呼ぶ。
- (2) 高山善行（一九八八）参照。
- (3) 高山善行（一九九一b）参照。
- (4) 北原保雄（一九八二）、仁田義雄（一九八九）参照。
- (5) 北原保雄（一九八二）、仁田義雄（一九八四）ではすでにその可能性が試されている。
- (6) 近藤論文からは教えられるところが多かった。ただ、助動詞の理解に関して、本稿とは立場が異なるようである。そのあたり、是非、本稿と読み比べていただきた。
- (7) ツ、ヌやケリのモーダルな側面に関する議論はすでにある。しかしながら、その大半は意味的観点からのものであって具体性、客観性を欠くものが多い。
- (8) 個別形式の中心の意味をつないでいく方法では、それぞれをつなぐレベルの統一が難しく、助動詞の意味体系をとらえられない。また、単純な「主観—客観二元論」のもとに助動詞を振り分けたり、序列化したりする方法では助動詞を文から乖離させてしまうことになる。
- (9) 1については北原保雄（一九八九）など、2は高山善行（一九八七）、小田勝（一九九〇）近藤泰弘（一九九一）など、3は高山善行（一九八八）など参照。
- (10) ツ、ヌの否定については近藤明（一九八九）に詳しい記述がある。
- (11) 「古典を読むための助動詞と助詞の手帖」（学燈社 昭和五九・六）「べからず」の項（森野宗明氏執筆）参照。
- (12) 連体ナリにはキ、ツが下接しない。高山善行（一九九一a）参照。
- (13) 伝聞表現とテンスとの関係については別稿を用意している。
- (14) ツ、ヌについては「確述用法」「強調用法」として知られており、モーダルな意味で理解されることが多い。
- (15) Chafe and Nichols (一九八七) 参照。
- (16) 高山善行（一九八七）参照。
- (17) 複雑な問題が絡むため、トモによる仮定逆接句はとりあげない。
- (18) 逆接的な意味関係を広く求めるならば、ヲ、ニなど格助詞出自の接続助詞も射程に入れておく必要がある。本稿ではまだ、それらをもふくめて検討する用意が整っていない。

- (19) 近藤泰弘（一九八六）、高山善行（一九九〇）参照。
- (20) 高山善行（一九八八）参照。
- (21) アリを含む形態であること、及び接続が連用、終止の二様にわたること。
- (22) 川端善明（一九七八）に次の記述があり、示唆的である。「或る一つの助動詞が、その属する層を、常に唯一にもっているものとは限らない。一つの助動詞がその意味において、二つ（以上）の層に収まるならば「収まる」と解釈され得るならば、それは、述語の意味の層自体の部分的な交渉である。」
- (23) 中西宇一（一九六九）参照。
- (24) 中田祝夫（一九六三）参照。北原保雄（一九八二）にも言及がある。
- (25) 係助詞の文末述語への作用については、係りが「浅い」「深い」などという表現が用いられてきた。これは述語の階層構造を承認していたことの証拠と言えないだろうか。従来の指摘が直観の域から出ないのは作用の受け皿としての階層がうまく設定されていなかったことによるのではないか。
- (26) ム、ベシ等も当然この問題に絡む。マシとム、ベシ等との意味的な関係については山口亮二（一九六八）参照。ただし、「現実—非現実」とモダリティ形式との関係については別稿を用意している。
- (27) ナナリ、ナメリ、ナルベシ、ナリケリ等とは複合辞化した独立したものとして、終止ナリ、メリ、ベシ、ケリ等とは別に扱うことも可能であろう。（文）体研究においてはこの見地から数々の成果が挙げられている。本稿ではあえてとりあげなかったが、今後「複合モダリティ形式論」として取り組みたい。

◇用例調査に用いた資料

- 「竹取物語」「伊勢物語」「枕草子」（以上「日本古典文学大系」岩波書店）「土佐日記」「紫式部日記」「更級日記」「古今和歌集」「拾遺和歌集」「金葉和歌集」「詞花和歌集」（以上「新日本古典文学大系」岩波書店）「蜻蛉日記」「大鏡」（以上「日本古典文学集成」新潮社）「源氏物語」（「日本古典文学全集」小学館）「日本古典文学集成」新潮社）「後撰和歌集」「後拾遺和歌集」「千載和歌集」「新古今和歌集」（以上「新編国歌大観」角川書店）

◇参考文献

- 中田祝夫（一九六三）「解釈文法雑筆（その二）——「べし」と「まじ」およびその「裏」と「表」（その一）」（国文学 言語と文芸）昭和三八・七）
飯倉篤義（一九六六）「語構成の研究」（角川書店）

山口 堯二 (一九六八) 「まし」の意味領域」(『国語国文』昭和四三・五) のちに
【論集日本語研究? 助動詞】(有精堂) に収められた。

中西 宇一 (一九六九) 「べし」の意味—様相的推定と論理的推定—」(『月刊 文
法』昭和四四・一二) のちに【論集日本語研究? 助動詞】(有精堂) に
収められた。

渡辺 実 (一九七二) 【国語構文論】(塙書房)

南不二男 (一九七四) 【現代日本語の構造】(大修館書店)

—— (一九八七) 【現代語の文法】(『国文法講座』6 時代と文法—現代語) 明
治書院

川端善明 (一九七八) 「形容詞文・動詞文概念と文法範疇—述語の構造について
—」(『論集 日本文学日本語』5 角川書店)

—— (一九七九) 【活用研究Ⅱ】(大修館書店)

北原保雄 (一九八二) 「日本語助動詞の研究」(大修館書店)

仁田義雄 (一九八四) 「係結びについて」(『研究資料日本文法』⑤助辞編 (一) 助
詞) 明治書院

—— (一九八五) 「文の骨組—文末の文法カテゴリーをめぐって—」(『応用言
語学講座第一巻 日本語の教育』明治書院)

—— (一九八九) 「文の構造」(『講座 日本語と日本語教育』4 日本語の文
法 文法 (上) 明治書院)

—— (一九八九) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」(『日本語のモダ
リティ』くろしお出版)

F・R・バーマー (一九八四) 【英語の法助動詞】(桐原書店)

近藤泰弘 (一九八六) 「結び」の用言の構文的性格」(『日本語学』昭和六一・一二)
(一九八八) 「ムード」(『講座 日本語と日本語教育』4 日本語の文法・
文法 (上) 明治書院)

—— (一九九二) 「中古語のモダリティの助動詞の体系」(『日本女子大学紀
要』平成三・三)

高山善行 (一九八六) 「推定表現」と「質問表現」の交渉」(『待兼山論叢』第三二
〇号)

—— (一九八七) 「従属節におけるムード形式の実態について」(『日本語学』
昭和六二・一二)

—— (一九八八) 「A係り結びVとA推量の助動詞V—中古語における、文表
現と助動詞層の交渉—」(『語文』第五一輯)

—— (一九九〇) 「ラムの特殊性をめぐって—(コトをくくる機能の潜在
—」(『日本語学』平成二・五)

—— (一九九一a) 「連体ナリと終止ナリの差異について」(『国語学』第一六
三集)

—— (一九九一b) 「連体ナリと終止ナリ—研究のながれとその意義—」(『国
語学叢史の研究』第一集)

Chafe and Nicholas (1986) "EVIDENTIALITY" The Linguistic Coding of
Epistemology (ABLEX)

近藤 明 (一九八九) 「助動詞ツ・ヌに否定辞が下接する場合—ヌナテを中心に
—」(『国語学研究』平成元・一二)

小田 勝 (一九九〇) 「中古和文における接続句の構造」(『国学院雑誌』平成二・
八)

— 本学助手 —